

永田 悦久 (ながた・よしひさ) 先生 エイベックス・ライブ・クリエイティブ株式会社 代表取締役社長

1956年生まれ 52歳。

1979年、日本大学芸術学部放送学科卒業。

1981年、(株)ハンズ入社。コンサートプロデュースを手掛ける。担当アーティストは、谷村新司・武田鉄矢・岸田智史・杉山清貴&オメガトライブ・菊池桃子・斉藤由貴・今井美樹 他多数。

1995年10月、アドバンス・プロモーション・インターナショナル(現 エイベックス・ライブ・クリエイティブ(株))代表取締役社長として入社。

現在、エイベックス・ライブ・クリエイティブ(株)代表

取締役社長。ライブコンテンツの企画・制作を主事業として、Every Little Thing、浜崎あゆみ、倅田来未、大塚愛などのアーティストライブを手掛ける。また、スティービー・ワンダー、アース・ウィンド・アンド・ファイアー、ディーブ・パープル、アンドレ・リュウ、ジェイク・シマブクロなどの海外招聘アーティストの公演もプロデュース。最近では、ニューヨークのパフォーマンス「Blue Man Group」のロングラン公演を行うなど、多角的に事業を行う。

**〈講義概要〉**

エイベックス所属アーティストのライブ企画・制作を主事業として、数々のライブのプロデュースを手掛けるエイベックス・ライブ・クリエイティブ株式会社代表取締役社長の永田悦久氏が、大規模ライブの運営について講義を行った。

講義では、日本の主要な野外音楽フェスティバルの特徴や、「a-nation」の現状を、データを使用し詳しく示した。その中で、「a-nation」の新たな取り組みなどを紹介し、運営方法や環境作りなどに関する様々な試みが存在することを提示。受講生は、多くの人に注目される華やかなステージの裏側にきめ細かい配慮があることを知り、様々な視点からものを見る姿勢の大切さを認識した。

また、経営的な事項だけではなく、「人の心」や「今のお客様と今のアーティストの結びつき」を重要視し、コンサートに関わった全ての人々が満足できるコンサートづくりを目指していることも説明。学生は、エンタテインメントのあり方を改めて考えさせられた。

〈受講生の感想〉

私はライブに行ったことがないです。私のライブのイメージは、狭い、暑い、大音量、人が多い、というものだったのですが、a-nationのお話を聞いて、客への配慮がとてまなされていることに驚きました。そういった配慮を心がけながらも収益を上げるという難しい点に対する工夫を詳しく知ることができて、とてもためになりました。

立命館大学・産業社会学部・1回生

私はライブへ行くのが大好きなのですが、今回の講義を通してライブやコンサートというのは、手作りであるということを実感しました。野外の場合、トイレ1つであれ、医務室1つであれ、何が起きるか想定をつかない野外での業務は、人の発案がコンサートの成功へとつながるんだらうなあと思いました。

京都光華大学・人間関係学部・2回生

サービスの対象であるゲストは、決して来場者だけではなくて、共に働く仲間であったり、協賛してくれる企業だと考える事こそが、先生がお話しされていた、スタッフの愛着であったりして、1000人規模の大きなフェスの運営をしていくにあたって大変重要な事であると感じました。

立命館大学・映像学部・2回生

大規模ライブ運営とは、アーティストの規模やコンセプト・ターゲットに合わせた開催地の決定だけでなく、他のイベントとの差別化や会場そのものの居心地の良さなどといった音楽以外の付加価値も重要になってくるのだと感じた。

龍谷大学・社会学部・4回生

経済状況が良くないなかで、ライブから収益を上げていくことは困難なことだと思われるが、ファンへの対応やスタッフの熱意という話を聞く限りでは、必ずしも利益やコストの問題だけがエンタテインメント産業を左右することではないということが興味深かった。

立命館大学・産業社会学部・2回生

私は将来、ライブ運営に関する仕事をしたいと思っているので、今日のお話は大変ためになりました。大規模ライブ、特にフェスと呼ばれる野外ライブは通常のライブハウス、アリーナなどで行われるライブと比べて、かなり特殊なものだと思っていました。(リハーサルがない、屋台等で飲食ができるなど。)しかし、今日のお話を聞いてその考えが少し変わりました。やり方次第で通常のライブ同様のアーティスト、オーディエンスへのケアもできるし、それ以上にエンタテインメント性を兼ね備えたサービスを提供できるのだと強く思いました。

立命館大学・産業社会学部・1回生

